

◆数十年前の短歌同人誌の友人で、今連絡をとっている三人と花見に行くことになった。一人が土産を用意して、もう一人は当日の企画案内の役である。年上の私を気づかって池袋駅の近くを選んでくれた。住宅街の中にある、羽仁吉一・もと子夫妻が大正十年に女学校として創立した自由学園「明日館」^{あすけいこく}は、アメリカの建築の巨匠フランク・ロイド・ライトとその弟子の遠藤新の設計によるもので、現在、国の重要文化財になっている。館内を見学した後は、広場の道路側、桜の大きが並んでいる下にテールブルがあつて、お茶を飲みながら積る話で、際限もなくおしゃべりがつづく。しばらくぶりの再会なので、場所を移して食事しながら、来し方、今のことなど色々語り合つて、まさに一期一会になるような思い出の花見になった。

市川茂子

◆田舎の空き家の片付けがまだ残つていて、月一回ほどの片づけに千葉に住む兄とこれもまだ足を運んでいる。片づけ自体は最終盤、ただ、その先のことが見えるようになってきた。相続手続きをした兄次第ということでもあるが、家の解体、土地の放手し、といったことである。解体に地元業者をつかうなら、補助金が出るというような情報もある。土地の課税評価額は下がる一方なので、急ぐ必要があるかもしれない、ということもあるが、墓じまいは決めているので、つどの家の裏手、墓参りする時間が失われるということでもある。

小野澤繁雄

◆薫風の中、南瓜の苗を植えた。伯爵という白南瓜とメルヘンという緑南瓜、両方とも西洋南瓜だが、甘味とホクホク感があつてとても美味しい。特に伯爵は皮が固くて長期保存が利く。適温で保存すれば正月まで持つ。冬至南瓜に最適である。冬至南瓜に西洋南瓜というのも変な気がするが、美味しさには替えられない。朝の涼しいうちに雌花に雄花をくっ付けてやると交配率が増すようだ。成長が楽しみである。

神村ふじを

◆今年父の五十回忌と母の二十七回忌に当たり、姉の長男に墓の維持を任せることにした。甥は還暦を迎え私は干支の戌の年でもあり嘉兆とも思える。墓石は河村家代々の墓となつているので、法要の第一歩として墓石を替えることにした。第二歩として、菩提寺主権の「高野山と真言宗総本山長谷寺の巡拝」に参加することにした。本番は十月の法要であり、施主の私には容易ならぬ一年である。

河村郁子

◆今回のエッセイ、はじめは一冊の本との関わりを書くつもりでした。最後まで本のタイトルを書

かずに。わかっていたら面白くないから。ただ、あの時代を書かないわけにいかないので友達のことを書き出したら、長くなってしまいました。あの時代が少しでも伝わればと思っています。

河内愛子

◆寒かったことが嘘のような昨今の気温です。一気に夏到来という感じがします。暑くなっても寒くなっても少しも上手くならないもどかしさを感じつつ、句作りをしています。年ばかり順調にしっかり取っているというところでしょうか。季節の変わり目ゆえお体に気をつけられるようお願いしております。

谷垣満壽子

◆四月十五日、山形県川西町フレンドリープラザで開かれた吉里吉里忌2018に参加した。井上ひさしさんを偲ぶ催しだ。今回は井上さんの上智大学からの友人である小川莊六さんの講話があった。フランス語学科での神父との交流やチエーホフ記念館訪問などの思い出を、ユーモアたっぷりに語ってくれた。今、井上さんの晩年のエッセー集『ふふふ』を読んでいる。乱れた世の中を嘆き憤慨しつつも、庶民の良心への信頼に満ちている。あれから八年。首相をはじめウソつきだらけの政治家と官僚による悪法の制定、原発再稼働の推進、沖縄の軍事要塞化、TPP（とんでもないペテンなパートナーシップ）加盟などなど、唾然とすることばかり。井上さんはあの世でどう思っ

ているだろうか。井上さんは私たちにこう言うだろう。「今こそ言葉の力を」と。新野祐子

◆青い花が好きだ。それも雑草のオオイヌノフグリのあの淡青色が、である。近くにこの花の咲く所があつて毎年咲くのを楽しみにしていたのだが、いつの間にか処分されてしまい残念に思っていた。ところが今年になってこれによく似た色の花を住宅街の庭先などで見かけるようになった。テレビでもこれが群生している様を報じている。こちらはネモフィラという立派な園芸種らしい。来年の花期にはぜひネモフィラ畑を見にゆきたいものだと思っている。松井淑子

◆このごろ、今住んでいる家や土地を売らないか、という電話や手紙がよく来る。近くの不動産屋からというわけではなく、大手の会社からである。住所をどこで調べるのだろう。近所の持ち家の人に聞くと、同様のチラシがよく入るといふ。それが関係あるのかなのか、このところ二軒の家がとりこわしにあり、木造はともかくコンクリートをは、音は、本当に不愉快である。この二軒とも町会も同じで、親しくしていたのでさびしくなってしまった。今までの町が変わってしまい、慣れるまでには時間がかかることであろう。丸山弘子

◆三月のお彼岸に亡母の故郷・山形を訪ねた。懐かしい方々とのつかの間の再会後、「思い切っ

て、来て良かった」と清々しい気持ちになった。札幌に戻るとまた多忙な日常が待っていたが、自分のアイデンティティの一部に触れたおかげか、立ち位置が安定した。ありがたいことだ。ところで息子・ハルは、中学二年生になり、授業で短歌を習っている。見よう見まねで作りもする。

春風に 梅の色とね 香りがね 山の奥まで 香り咲くかね（ハル作） 山内裕子

